

記録

16ミリ

カラー／20分

- 自主企画
- 協力  
(財)日本視聴覚教育協会
- 指導  
文部省視学官  
新川昭一  
埼玉大学教育学部教授  
池辺国彦  
埼玉大学教育学部附属中学校教諭  
村上博俊
- 製作協力  
木工芸家  
真田信夫  
プロダクト・デザイナー  
小松 誠

スタッフ

- 製作  
村山和雄
- 脚本・演出  
花崎 哲
- 撮影  
山屋恵司
- 照明  
水村富雄
- 編集  
沼崎梅子
- 音楽  
長沢勝俊
- 録音  
伊藤 亨
- 解説  
武田 広

文部省特選 1988年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞

デザインを工夫した標識や絵地図などは、わかりやすいばかりでなく、見る人を楽しい気持ちにさせてくれる。映画では、身近な道具のデザインや、木工芸家と卓上小物のデザイナーの製作現場で、デザインされていく過程と、出来上がった作品をみていき、デザインの発見と、その楽しさについて考える。



「デザイン」は今ではだれもが知っている言葉である。そのデザインを考え、作る、使うというデザインの楽しさをこの映画は描いている。現代社会の中でデザインの範囲はますます広がってきている。また、歴史を振り返ってみると、例えば縄文土器にみられる縄目文様など、人々がものを作り始めた時から、デザインの心があったことがわかる。暮らしの道具の中にもデザインの優れたものが多い。それらは長い間にその使い勝手から人々に好まれる形になり、洗練されていった。

2人のデザイナーの工房を訪ね、その仕事ぶりをみながらデザインの楽しさや喜びについて聞く。1人は家具の木工芸家、もう1人は、食器など卓上小物のデザイナーである。一品生産と量産の違いはあっても、2人のデザインに対する考えには、共通するところが多い。

次に、貯金箱コンクールに集まった小中学生の作品をみる。それらは自由な発想と手作りの魅力に溢れている。デザインを工夫し、自らの手で作ってみることで、ものを見る目が養われる。そしてそれは、調和のとれた明るく豊かな生活を作り出していく。